

中越地震復興支援が生んだ 交流と元気



新潟県十日町市池谷・入山集落



ボランティアのほとんどは刈り払い機を使うのは初めてだったが、村人といっしょになって頑張っていた。



秋の道普請の草刈り。入山集落は離村して住民はいなくなったが、道普請には離村した人たちも帰ってきて草刈りをしていた。



六年前の十月二十三日に起きた中越地震では、新潟県十日町市池谷集落、入山集落も大被害にあった。家屋は全半壊、道は崩れ、田んぼには地割れのクレバスができた。

地震直後、国際緊急援助団体のNPO法人「JEN」のボランティアが、廃校になっていた池谷分校をベースキャンプに復興支援活動を始めた。当初、緊急援助活動は二カ月間で終わる予定だったが、活動は六年たった今も続いている。また、JENの他に、国際航空貨物会社「FedEx」、外資系証券会社「Morgan」や一般市民も加わるようになり、六年間に延べ一〇〇〇人もの人たちがボランティアにやって来た。

中越地震のときは「もう、村をたたくしかないか」と追い詰められていたが、見ず知らずのボランティアの人たちが、村のために汗水たらして手伝ってくれる姿を見て、住民の意識も少しずつ変わっていった。ボランティアで来た人たちのほうは、村人や農業に接して逆に元気をもらい、来週は会社で頑張ろうという気持ちになったという。

今、震災の復興は一段落している。そして地元では、池谷、入山の人たちを中心とした「十日町市地域おこし実行委員会」が発足し、農業体験や道路の草刈り、分校の改装など、一年中いろんな活動を始めている。ボランティアで来た人たちがや都会の人たちに食べてもらおうと棚田で育てた米の産直も始めた。

現在、池谷集落は七戸。かつて一五戸あった入山は平成元年に最後の戸が離村し、集落はなくなったが、数人が田畑に通って農業を続けている。だが、ほとんどが七〇歳を超える人たちだ。

夜の村人とボランティアの交流会で、「農業は頑張ってもあと五年だな。みなさんの別荘や会社の保養地にしてもらってもいいよ」と言うおじさんがいた。代表の山本浩史さんは「ボランティアとの交流を深めていくと同時に、都会人のエコトリズムや企業の社員研修所などに活用してもらい、地域おこしをしていきたい」という。



10月2日、イネ刈りに30人のボランティアが来た。中越地震で地割れした田は補修され、有機栽培・はざ架けの「山清水米」として産直している。



国際航空貨物会社や外資系証券会社の社員たちも参加していたので、外国人も多かった。





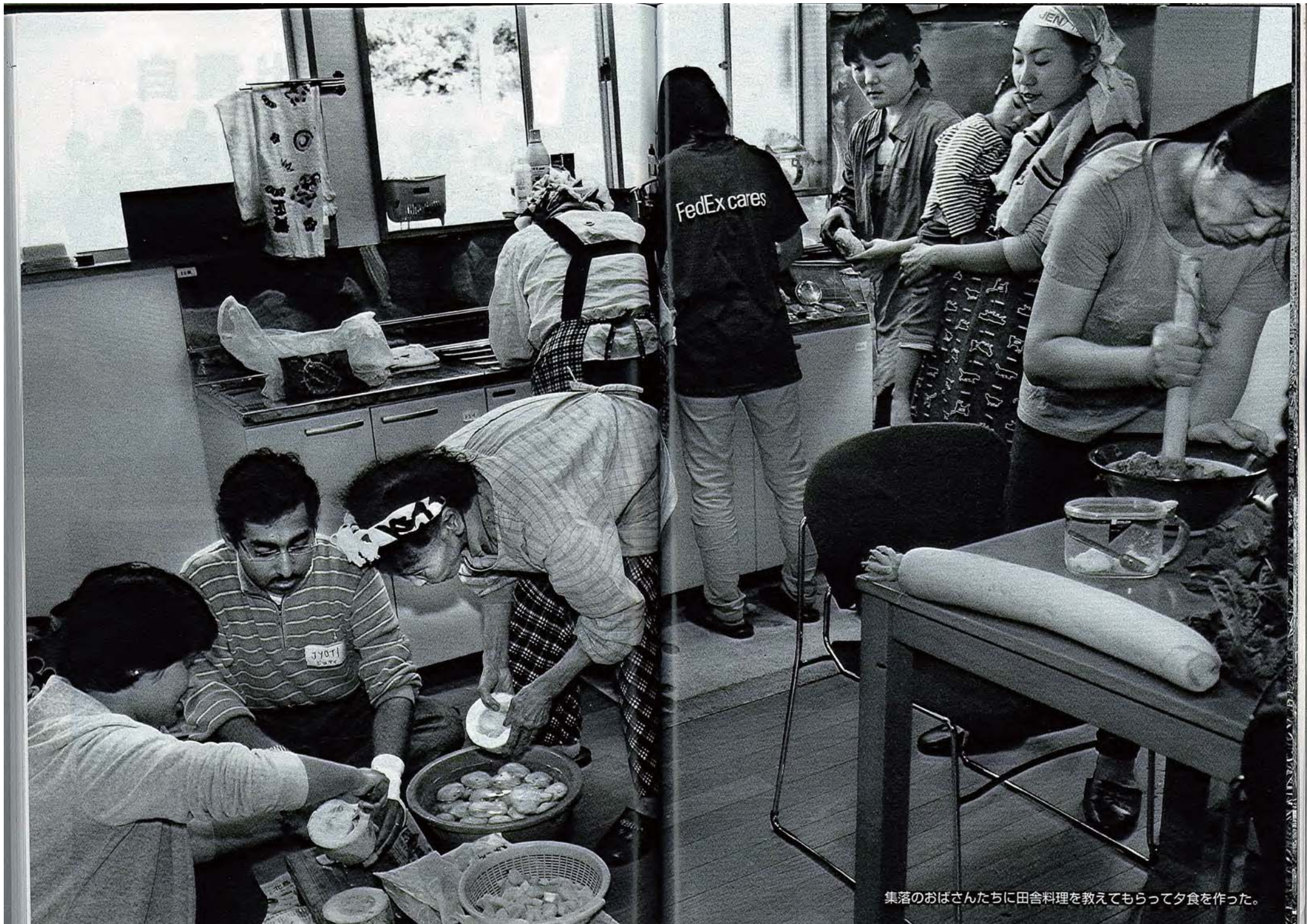
今年は猛暑のうえにイネ刈り前の長雨で倒伏し、田はぬかるんだ。



刈り残したイネを起こして刈り取るボランティア。



インド人夫妻はイネ刈りは初体験だったが、おもしろがって手伝っていた。



集落のおばさんたちに田舎料理を教してもらって夕食を作った。



夜は村人とボランティアの交流会。「米づくりのたいへんさを知って、ご飯を残さなくなった」
「手伝いに来たのに逆に元気をもらった。来週は会社で頑張るぞー」……。夜遅くまで盛大に続いた。



撮影・橋本紘二